

浅川扇状地遺跡群

よし だ ふる や しき
吉田古屋敷遺跡(4)

た まき い がえり
田牧居帰遺跡(2)

2007年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡や遺物は、当時の人々の暮らしぶりを生々しく現在の私達に伝えてくれます。

本書で報告しております吉田古屋敷遺跡は、長野市北部の広大な浅川扇状地遺跡群に含まれており、これまでに縄文時代中期以降、ほぼ連続した人々の生活の痕跡が確認されています。また、田牧居婦遺跡は、犀川扇状地東南の更北地区に位置する奈良から平安時代の集落遺跡です。今回、宅地造成および集合住宅の建設にともない、失われる埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。

ここに長野市の埋蔵文化財第119集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。各調査の規模は比較的小さなものでありましたが、遺跡からは貴重な遺構・遺物が出土しています。その成果は連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役に立てたければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様にお礼申し上げます。

平成19年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩睦秀

例 言

- 1 本書は、平成18年度に長野市内で計画された宅地開発事業等にもなって実施した埋蔵文化財の各遺跡発掘調査報告書を、長野市の埋蔵文化財第119集として合冊にしたものである。
- 2 各遺跡の発掘調査は、各事業主体者からの委託を受けて埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づいて長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。事業主体および「起因事業」は次のとおりである。

（調査遺跡）	（事業主体者）	（起因事業）
吉田古屋敷遺跡	ワンダーランド株式会社	「ドリームコートセブン建設」
田牧居帰遺跡	東邦商事株式会社	「アメニティタウン二次開発団地」

- 3 本書の編集および執筆は各遺跡の調査員が担当し、各報告書の調査体制に記した。
- 4 遺構図中に示した座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 5 遺構の名称として、罅穴住居＝S B、溝跡＝S D、土坑＝S K、性格不明遺構＝S Xという略号を用いた。
- 6 調査によって得られた図面・遺物等の諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。なお出土遺物の注記記号は、田牧居帰遺跡は「T I K II」、吉田古屋敷遺跡は「A Y F D」と表記してある。

浅川扇状地遺跡群




よしだふるやしき
吉田古屋敷遺跡(4)

—ドリームコートセブン新築工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007年3月

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、ワンダーランド株式会社による共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、ワンダーランド株式会社代表取締役林部篤夫と長野市長鷲沢正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市吉田3丁目809-8に所在する。
- 4 発掘調査は、平成18年10月25日から11月10日にかけて行い、調査面積は130㎡である。
- 5 遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系（日本測地系2000）および日本水準原点に基づく。
- 6 遺構図は、調査区全体図を1：80、各遺構図を1：80もしくは1：40の縮尺で掲載した。なお、遺構図中のスクリーントーンは  が焼土面を表している。
- 7 遺物図は、土器が1：4、土器片および拓影図が1：3、石器・石製品が1：2、銭貨が1：2の縮尺で掲載した。なお、弥生土器・土師器は断面を白抜き、須恵器は断面を黒塗りて表している。また、 は黒色土器の黒色処理部を、 は赤色塗彩された土器の赤彩部をそれぞれ表している。
- 8 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略記号「AYFD」を用いて注記を行い、遺構図版類と共に長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

例言・目次

第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌(抄)	
第II章 調査地周辺の環境	4
第1節 地理的環境	
第2節 考古学的環境	
第III章 調査の成果	6
第1節 基本土層	
第2節 調査の概要	
第3節 遺構と遺物	
第IV章 結語	17

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査区周辺宇界図	2
図 3	周辺の遺跡分布図	3
図 4	土層柱状図	6
図 5	調査区設定図	6
図 6	調査区全体図	7
図 7	1号住居	8
図 8	1号住居出土土器実測図	8
図 9	2号住居	9
図 10	2号住居出土土器実測図	9
図 11	3号住居	10
図 12	3号住居出土土器実測図	11
図 13	S X 1	12
図 14	遺構覆土・遺構外出土土器実測図	14
図 15	出土土器実測図（古墳時代）	15
図 16	出土土器実測図（古代以降）	15
図 17	石器・石製品実測図	15
図 18	古銭拓影図	15

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

調査地は長野市北東部の吉田地区に位置し、JR北長野駅北側から長野電鉄信濃吉田駅周辺の旧小字「古屋敷」にあたる。周囲では近年市街地再開発事業により、大型商業施設及び公共施設の整備が進められており、共同住宅の建設も増加している。

平成18年6月19日に西畑建築設計より、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認照会がなされ、開発行為区域が「浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡」の範囲内であり試掘調査が必要である旨を回答した。その後、保護協議を重ね、既存建物解体に併せた9月25日・26日に試掘調査を実施した。

試掘調査では任意の地点2箇所に試掘坑（トレンチ）を設定し、地表下約170cmまで掘削した。両試掘坑において、地表下約70cmにて遺物包含層および遺構の一部を確認した。この結果をふまえ、埋蔵文化財の記録保存のための保護協議を行い、10月20日付で事業主であるワンダーランド株式会社と長野市との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、発掘調査の実施に至った。発掘調査は10月23日から11月10日までの19日間に渡って実施した。



図1 調査地点位置図（1：10,000）

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 睦秀
総括管理者	文化財課長	北村 真一郎
総括責任者	局主幹	
	兼埋蔵文化財センター所長	矢口 忠良
	(庶務担当) 係長	宮沢 和雄
	職員	吉村 久江
	事務員	塚田 容子
	(調査担当) 係長	青木 和明 (調査員)
	主査	風間 栄一・小林 和子
	主事	宿野 隆史 (調査員)
	専門員	遠藤 恵美子・長 瀬 出・山野井 智子
		石丸 敦史・小出 泰弘・森田 利枝
		山岸 千晃・小池 勝典 (調査員・編集)
		柴田 洋孝 (調査員・編集)
発掘作業員	上原律江・倉島邦子・後藤一雄・塩入洋子・清水昭光・田村秀之・中嶋昭二郎・寺島直利 宮澤周子・宮下美代子・山口勝己・和田五男	
整理調査員	青木善子・池田寛子・多羅沢美恵子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子・矢口栄子	
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子	
遺構測量	株式会社写真測図研究所	

発掘調査の実施にあたっては、ワンダーランド株式会社、アクト全座有限会社の皆様にも多大な協力を賜った。記して感謝申し上げます。



調査区全景 (東から)



調査区全景 (西から)

第3節 調査日誌 (抄)



表土剥ぎ作業風景

11月1日(水)

SB2完掘、写真撮影。引き続き、SB1、SB3およびpit群の掘り下げ。

11月2日(木)

SB1完掘、写真撮影。SB3、引き続き掘り下げ。

11月6日(月)

SB3完掘、写真撮影。発掘区全体写真撮影。



作業風景



測量風景

10月25日(水)

重機による表土除去に着手する。
複数のpit、および堅穴住居を検出する。

10月30日(月)

作業員による発掘調査を開始する。
遺構検出作業、および遺構の掘り下げ。

10月31日(火)

遺構検出作業終了、各遺構の掘り下げ。

11月7日(火)

測量作業。

11月8日(水)

結報作業。

11月10日(金)

追加調査を行った後、全ての調査作業を終了する。

第Ⅱ章 調査地周辺の環境

第1節 地理的環境

吉田古屋敷遺跡が所在する吉田地区は、浅川扇状地のほぼ中央部に位置する。その浅川扇状地は、長野市北西に位置する飯綱山を水源とする浅川の堆積作用によって形成された扇状地である。浅川東条を扇頂に、南は城東・西和田で裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫源の後背湿地に接している。扇頂部の勾配は1,000分の25あり、扇状地は南東方向に傾斜している。扇端側では1,000分の15と勾配がさらに緩くなっており、丁度、吉田古屋敷遺跡が所在している吉田三丁目付近から勾配が緩み始める。また、浅川も吉田付近で上流域から中流域に移り、流水方向も南東から北東に進路を変えて、豊野で千曲川に合流する。

吉田地区には旧北国街道（現県道長野豊野線）が通っており、商業・宿場の町として発展。その後も、信越本線・長野電鉄の開通などにより交通網が整備され、人口が増加し、長野市近郊の住宅地に変貌した。それに合わせて、マンション建設や東急ライフの建設、北長野通り（SBC通り東端）の拡幅、辰巳隧道の開通など、北長野駅を中心とした再開発が行われるようになった。現在も農地の宅地化・マンション建設が進み、再開発事業は継続中である。

<参考文献> 『長野市誌 第1巻 自然編』 長野市誌編纂委員会 1997

『長野市誌 第8巻 旧市町村史編』 長野市誌編纂委員会 1997



図2 調査区周辺字界図（1：10,000）（地形図は大正15年測量、昭和27年修正）

第2節 考古学的環境

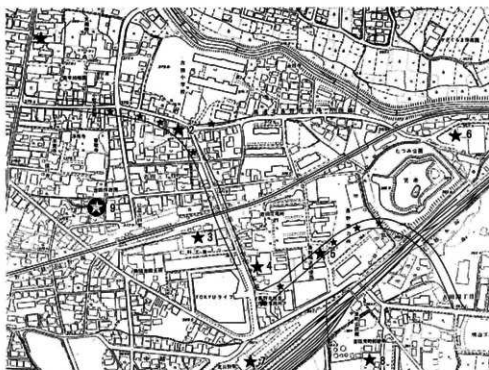
吉田地区は、早くから宅地化や事業所建設等の開発が進み、埋蔵文化財の包蔵内容には不明の点が多かった。ところが、近年の再開発事業等により、徐々に具体的な遺跡の内容が明らかになりつつある。

周辺地域で人々の生活の痕跡が認められるようになるのは、縄文時代中期以降である。中でも、本遺跡と時的に関わりの深い弥生時代中期～古墳時代後期の遺跡も、複数所在している。

弥生時代中期の遺跡では、吉田古屋敷遺跡－北長野駅前B1地区再開発事業地点－（3）や吉田古屋敷遺跡－ボレスターステーションシティ北長野建設地点－（4）、吉田四ツ屋遺跡－グランドハイツ北長野開発事業地点－（8）、辰巳池遺跡－アルピコ建設（株）吉田宅地造成地点－（6）で、複数の竪穴住居や土坑等が確認されている。弥生時代後期においては、吉田古屋敷遺跡（3）で竪穴住居1軒・木棺墓1基が、さらに吉田町東遺跡－民間宅地造成地点－（1）・北長野通り道路改良地点－（2）において竪穴住居が1～2軒ずつ確認されている。

古墳時代前期には、吉田四ツ屋遺跡（8）や吉田古屋敷遺跡－J R吉田踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点－（5）において数軒の竪穴住居や埴丘墓、環濠等が認められる。古墳時代後期には、確認された遺構の数が増大しており、吉田古屋敷遺跡（3）で竪穴住居5軒、吉田町東遺跡（2）において竪穴住居10軒が確認されている。本遺跡も含めて古墳時代後期段階には、周辺地域に大規模な集落が形成されつつあったものと考えられる。

本遺跡を中心として、周辺地域においては縄文時代中期以降、ほぼ連続として人々の生活の痕跡が確認されている。したがって、本遺跡周辺地域は、現在に至るまで安定した生活居住域であったものと推察される。



吉田町東遺跡（1. 宅地造成地点 2. 北長野通り地点） 吉田古屋敷遺跡（3. B-1再開発地点 4. 共同住宅建設地点 5. J R吉田踏切調査地点 6. 辰巳池遺跡 7. 浅川遺跡群（新幹線地点） 8. 吉田四ツ屋遺跡 9. 吉田古屋敷遺跡（ドリームコートセブン建設地点）

図3 周辺の遺跡分布図（1：4,000）

第三章 調査の成果

第1節 基本土層

基本土層は、事前に行われた試掘調査によって確認された。第1層は旧建物解体時によって盛られた砂利層で、直下の土器片を含む黒褐色の第2層にて、遺構の落ち込みが確認された。第3層は黄褐色土となり、第4層以下には砂質土層、粘土層が堆積していた。第3層以下に遺物の混入が見られなかったため、遺構の検出面を黄褐色土層上面に設定し、発掘調査を行った。

第2節 調査の概要

調査区は、敷地内建物部分の約300㎡である。建物の形状から、調査区東端は南側に2m程突出し、調査区の形状はL字状を呈する。ただし、突出部は攪乱坑により遺構が破壊されており、さらに排土置き場や足場確保の必要性等から、実質的な調査面積は南北約7m・東西約18mの長方形を呈する約130㎡となった。なお、調査区内においては、旧建物の基礎に関する攪乱坑が複数存在しており、遺構の多くは一部が既に破壊されていた。

遺構は、古墳時代後期の竪穴住居3軒（SB1・2・3）の他、性格不明遺構1基（SX1）、複数のpit群等が検出されている。この内、SB3は1辺約7.6mの方形を呈する大型の住居地で、間仕切り溝や壁溝・柱穴の他、貼床面に複数の土坑、および焼土面が2箇所確認された。SB3の廃絶後、1辺約3.3mの方形を呈する小型のSB2が構築されている。SB1は1辺約4.8mの方形を呈する、中規模の住居地である。いずれの住居地においても、攪乱坑等のためカマドは破壊されており、検出することができなかった。しかし、いずれも主軸は北西～北北西を向くものと想定され、周辺地域の同時期の竪穴住居と様相を一にしている。

出土遺物は、古墳時代後期の土師器が主体を占めるほか、小片ながらも多数の弥生土器片（中・後期）、少量の須恵器片、中世土師器片、石器・石製品（剥片・垂飾状石製品）等が出土している。

本調査区は、古墳時代後期の大规模な集落の一部に相当すると考えられ、周辺地域における当該期の集落の広がりを検討する上でも重要な意味を有している。また、遺構こそ確認されていないが、多数の弥生土器片の出土は、近隣の弥生時代中・後期の遺跡と比較・検討する上でも大きな役割を果たすものといえよう。



図4 土層柱状図

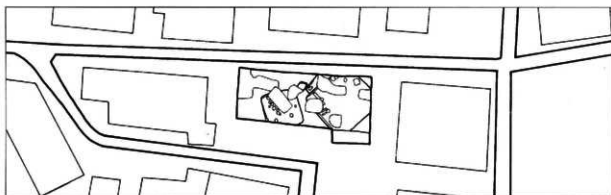


図5 調査区設定図（1：500）

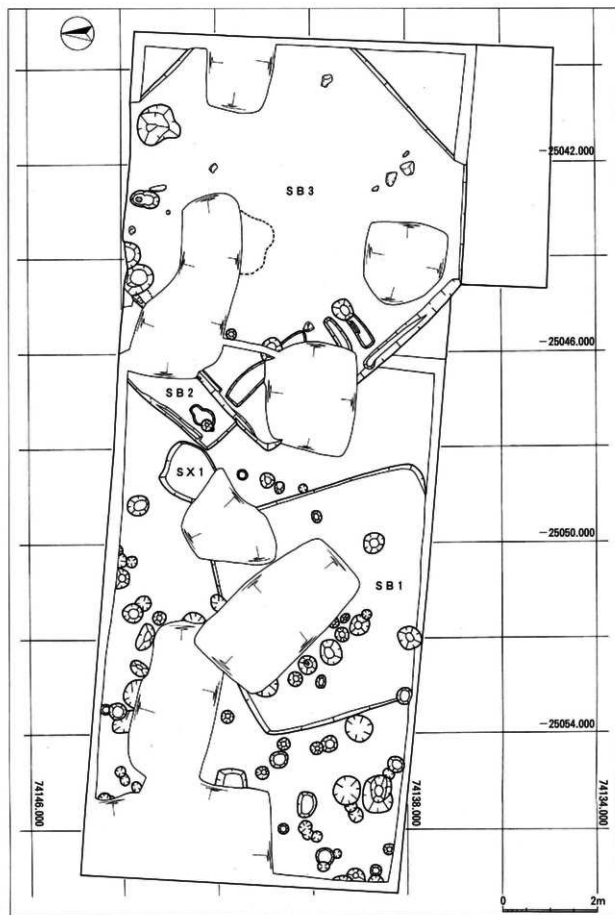


图6 調査区全体図(1:80)

第3節 遺構と遺物

① 竪穴住居

1号住居 (SB-1)

1辺約4.8mの方形を呈し、主軸は真北より西へ約16.5度傾いている。住居の南西側は調査区外のため未調査であり、住居址の中央部～北側、及び北東側は試掘坑・攪乱坑により破壊され、詳細は不明である。検出面から

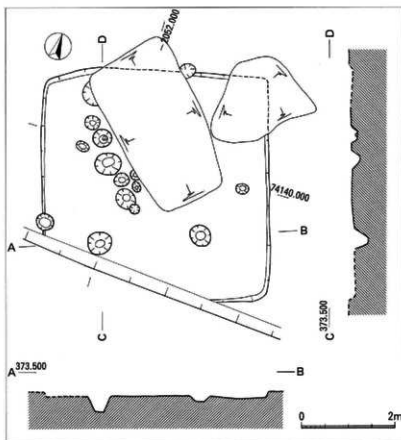


図7 1号住居 (1:80)

床面までの深さは約12cmで、他の住居址に比べ、確認された掘り込みは浅い。主柱穴3本分の他、床面より掘り込まれた pit が複数検出されている。壁溝・間仕切り溝、および貼床等は認められない。カマドについては、試掘調査の際破壊してしまったものと考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器が主体であるが、小片が多く、図化できたのは2点のみである。

1は甕の胴部上半～口縁部である。外面はタテ及び斜め方向のハケメ、内面はナデ調整が施される。

2は鉢の胴部下半～底部である。外面は右上～左下方向のヘラミガキ、内面は黒色処理が施される。

遺物の様相より、SB1は古墳時代後期の所産と考えられる。



1号住居完整状態 (南東から)

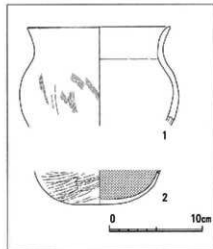


図8 1号住居出土土器実測図(1:4)

2号住居 (SB-2)

一辺約3.3mを呈する小型の方形住居で、主軸は真北から西へ約48度傾いている。SB-3廃絶後に掘り込まれたものと思われ、北壁に壁溝とpitが検出された。検出面から床面までの深さは約20cmである。床面は、貼り床などが認められず、しまっていない。なお、床面からは直径10cm程の自然礫が、面的に検出されている。住居の半分が攪乱坑によって破壊されており、カマドなどの焼土の痕跡は確認できなかった。また、確認されたpitは浅く、位置的にも柱穴ではないと思われ、他に柱穴らしきpitを確認することもできなかった。

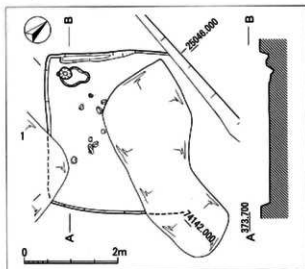


図9 2号住居 (1:80)



2号住居完備状態 (南東から)

遺物は、SB-1同様にもその多くは小片であり、図化できたのは2点のみであった。

1は坯の胴部下半から口縁部にかけてである。内・外面共にヘラミガキが施され、黒色処理を受けていた。

2は甕の底部である。残存率は低いが、内・外面ともにハケによる調整痕が明瞭に残っていた。

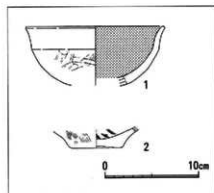


図10 2号住居出土土器実測図(1:4)

3号住居 (SB-3)

一辺約7.6mを呈する大型の住居で、主軸は真北から西へ約45度傾いている。SB-3は、今回の調査区の中で最も大型のものであったため、四隅のほとんどが調査区外となってしまったが、北西コーナーはかろうじて検出された。検出面から床面までの深さは約30cmで、3軒の住居の中で掘り込みが一番深い。ほぼ全面にわたって貼床が認められ、堅くしまっていることが確認された。住居北壁に位置していたと考えられるカマドは、攪乱坑によって破壊され、一部焼土を確認するのみであった。また、住居中央部には堅くしまった焼土面が確認できた。柱穴と思われるpitは3つ確認でき、その位置からして4本柱ではなく、6本柱構成であると想定できる。壁溝は北と西壁のみ検出された。

住居北西部には浅い溝が3本検出され、間仕切りのための溝であると考えられる。しかし、こちらも攪乱坑によって、仕切られた内部を精査することはできなかった。住居北東部には浅い土坑が2つと、深いpitが1つ検出されるなど、前述した間仕切り溝のある住居西側と対照的であるようだが、こちらも性格は不明である。

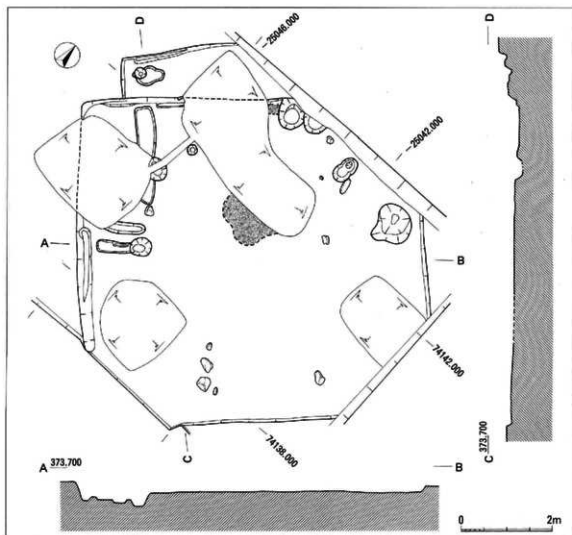
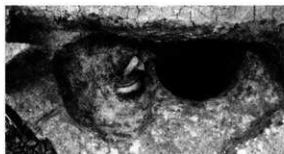


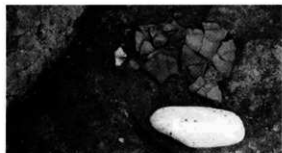
図11 3号住居 (1 : 80)



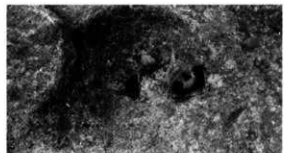
3号住居完掘状態 (南東から)



3号住居床面土坑内遺物出土状態



3号住居床面土器出土状態



3号住居床面土坑内遺物出土状態

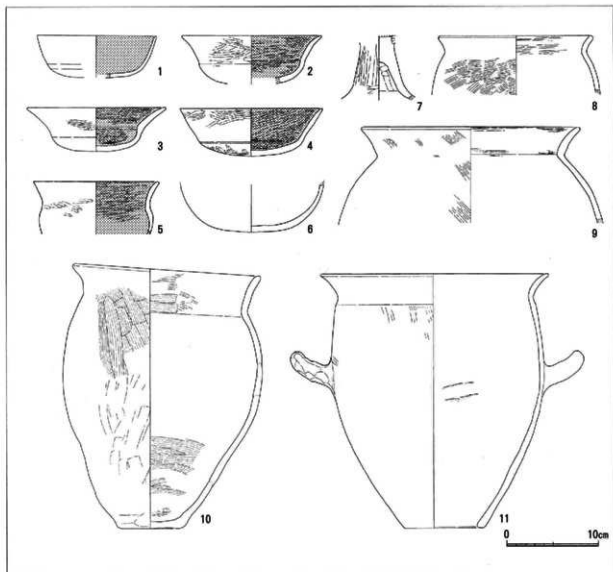


図12 3号住居出土土器実測図(1:4)

図化することができた遺物は、坏が4点、鉢が2点、高杯1点、甕3点、甔1点であった。

1～4(坏)は、内・外面共にヘラミガキが施され、黒色処理も施されている。これらの坏は、いずれも古墳時代後期に属するもので、外面稜線が坏部下方へと移行していく変化からして、2から4に向かって新相を示すものと考えられる。

5・6(鉢)は、内・外面にヘラミガキが施されているが、黒色処理を受けていたのは5だけであった。6は全体的に摩滅しており、調整痕は不明瞭である。

7(高杯)は、脚部上部は縦方向、屈折部は横方向のヘラミガキが施されているが、屈折部のミガキは不明瞭である。坏部分は欠損しているが、ヘラミガキと黒色処理を受けていることが認められた。残存している部位に穿孔は認められない。

8～10(甕)の中で、ほぼ完形なのは10のみで、8・9は口縁部から胴部上半までである。いずれも、口縁部にはヨコナデ、胴部外面はハケによる調整が施される。8は横方向、9・10は縦方向のハケ調整の後、ナデ調整が施される。10は、外面にススが付着し、器面が摩滅している。内面は、3点とも横方向のハケ調整が施されている。また、10の甕は、長胴化が認められることから、6世紀代(古墳時代後期)に位置づけられる。

11(圖)は、外面に縦方向のハケ調整が行われた後、ナデもしくはヘラミガキが施されていると思われるが、摩滅が著しい。口縁部は横方向のナデ調整を受ける。また、把手は片方のみが残存である。胴部内面は、縦方向のハケ調整が施される。底部付近は斜め方向のハケ調整の後、ヘラミガキを受けているとみられる。

② 住居外 pit 群

発掘区西側、SB1の西側～北側にかけて、多数の pit が集中して検出された。これらの pit 群は、直径が20～50cm前後、検出面からの深さが30cm前後のものが多数を占める。出土した遺物はごくわずかで、土師器片や弥生土器片が少量認められるが、小片のため図化には至らなかった。配列に規則性は認められないことから、掘立柱建物等の想定は困難であるものと考えられる。

③ SX1 (性格不明遺構)

調査区のほぼ中央北寄り、SB1とSB2に挟まれる位置に、性格不明の遺構が1基確認されている。遺構の南西側は掘乱坑で破壊されており、詳細な平面形は不明であるが、残存部の様相から直径120cm程の不整な円形を呈するものと想定される。検出面から遺構底面までの深さは約20cmで、遺構の底面は緩やかな碗状を呈する。

この遺構からは出土遺物が皆無であり、時期や性格を判断することはできなかった。

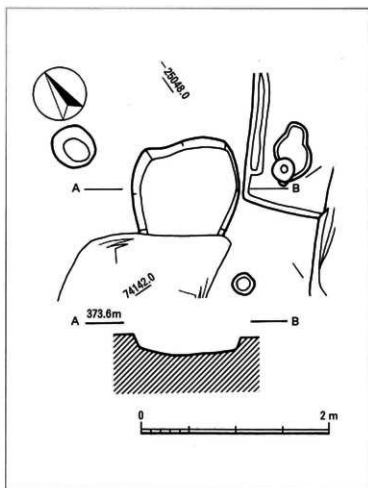


図13 SX1 (1:40)

検出遺構一覧表

遺構名 (記号)	時代 (期)	遺 構		出 土 土 器			その他出土遺物 石器・金属製品他	遺物注記 (記号)
		形態・規模	備 考	重量(g)	実測数	特 記		
1号住居 (SB-1)	古墳後期	方形 一辺約4.8m		1,810	2			AYFD SB1
2号住居 (SB-2)	古墳後期	方形 一辺約3.3m	SB-3に重複	2,640	2			AYFD SB2
3号住居 (SB-3)	古墳後期	方形 一辺約7.6m	SB-2が重複	15,710	11		石器・石製品各1点 出土	AYFD SB3
性格不明遺構(SX-1)	不明	不明(不整形な円形?)		0	0			AYFD SX1
柱穴群(pit)	不明	円形 直径20～50cm前後		80	0			AYFD P
合計				20,240	15			

③ 遺構覆土中および遺構外出土遺物

(1) 土器

1. 弥生土器

下記の弥生土器は、遺構内覆土・遺構外出土のもので、図化が可能であった小片と、接合ができたものに関して抽出したものである。1～15・18～22は、弥生時代中期栗林式の壺の破片で、16・17は、後期前葉吉田式の壺の破片である。23～36は中期栗林式の甕の破片、37～43は後期後葉箱清水式の壺・広口壺・高杯の接合個体と、鉢の破片である。

1～4は壺の口縁部で、1・2は2条のヘラ描山形文、4は縄文を施した後に山形文を施す。3は口縁部端部に櫛描縹状文を施す。

5～10は壺の頸部で、7以外は全てヘラ描横線文が施されている。5は横線文の上部に粘土紐を貼り付け、刻み目を施す。6は横線文下部に縦方向の刻みが入っている。7は、櫛描文を施した後に押引列点文が施されている。8は横線文上部に磨消縄文を、9は横線文下部に櫛描波状文を施している。10は横線文の間に山形文を施す。

11～17は壺の肩部。11は縄文を施した後に、横線文と鋸歯状の文様を加え、鋸歯文の内部に押引列点文を施す。12は、鋸歯状の文様の中に複数の刺突文が施される。13はヘラ描横線文と、その間に磨消縄文が施されている。14・15は横線文、16・17は鋸歯状文が施されている。

18～22は壺の胴部で、18はヘラ描横線文と山形文、19は磨消縄文と横線文が施される。20は縦横の横線文、21は文様内部に押引列点文が施されている。22は重山形文が施されている。

23～27は甕の口縁部である。23・26は口唇部に刻み目が見え、26には指頭瓦痕も加えられている。24・27は櫛描縹状文のみであるが、25には縹状文下部に縦羽状文が施されている。

28～32は甕の肩部で、32以外は櫛描波状文が施されている。28はヘラ描波状文、29は櫛描縹状文との組み合わせである。30はハケ調整が行われた後に波状文が施されている。32はヘラ描の斜線文が施されている。

33～36は甕の胴部である。33・34・35は縦の櫛描羽状文で、36は櫛描交斜線文が施されている。

37～39は壺で、37は外面にハケ調整、内面にはハケ調整の後にミガキを施している。また、口縁部には赤彩もみられる。38は、外面に横方向のミガキ調整と赤彩、内面にはナデ調整が施されている。39は広口壺の底部から胴部にかけてである。外面に縦方向のミガキ調整と赤彩、内面には横方向のミガキ調整が施されている。

40～42は高杯で、40・41は杯部、42は脚部である。40は、外面に横方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整と赤彩が施される。内面にも同様に、横方向のハケ調整とミガキ調整が行われ、赤彩が施されている。41は、外面に縦方向のハケ調整の後、横もしくは斜め方向のミガキ調整と赤彩が施される。内面は、横方向のハケ調整の後に縦方向のミガキ調整が行われ、赤彩が施される。42は、外面に縦方向のミガキ調整の後に赤彩を施す。内面はハケ調整の後に、ナデ調整が行われている。穿孔部分は認められない。

43は、鉢の口縁部の破片である。内・外面共に、横方向のハケ調整の後にミガキ調整が施され、赤彩が施される。また、一部穿孔が残存している。

以上、遺構覆土・遺構外出土の抽出した土器を列記したが、その多くは弥生時代中期の栗林式土器に比定されるものであった。本調査区において該期の遺構は検出できなかったが、近接する吉田古屋敷遺跡(B-1地区・ボレストステーション建設地点)・吉田町東遺跡からは弥生時代中期の遺構が確認されている。よって、本調査区出土の弥生時代中期の土器は、周囲に点在していると思われる弥生時代中期の生活域からの流入品とみられる。

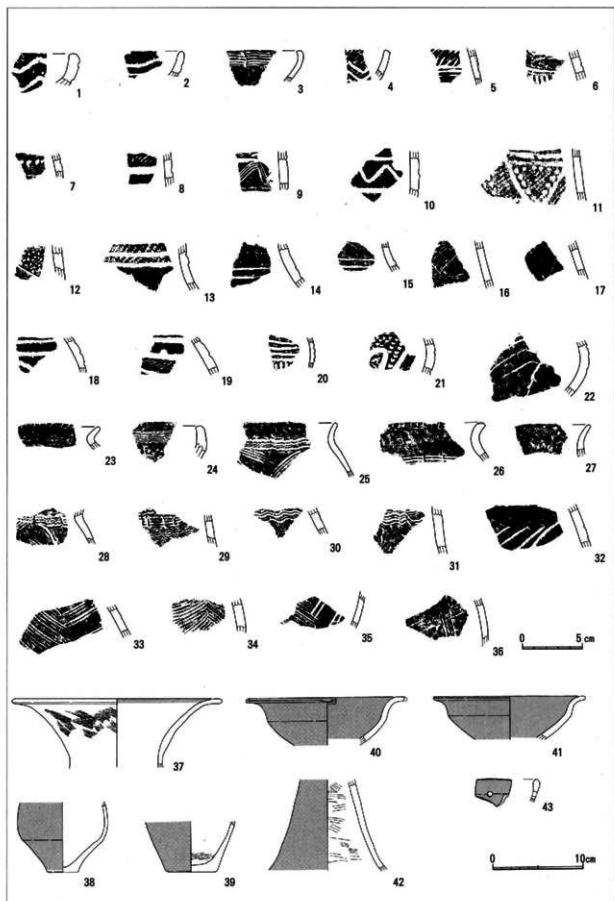


图14 遺構覆土・遺構外出土土器実測図 (1~36… 1 : 3 37~43… 1 : 4)

2. 古墳時代の土器

1・2は古墳時代前期、3・4は古墳時代後期に属する。1は壺の口縁部で、いわゆるひさご壺の影響を受けているものと考えられる。SB3内覆土中より出土している。口縁端部に向かって緩やかに内湾し、端部は先細りして断面三角形状におさまる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ調整が施されている。2は、小型器台の脚部で、試掘調査の際に出土した。外面はヘラミガキ、内面は一部ハケメが残存している。脚部下方は外方に向かってハの字に屈折して開き、残存部下端に3方向の透かし孔が認められる。3は坏で、検出面より出土している。口径14.6cm、器高約5.3cmで、器高のほぼ中央部に肩部の稜線が位置している。外面はハケメの横方向のヘラミガキ、内面はヘラミガキおよび黒色処理が施される。4は甕の底部である。底径は約6.2cmである。内外面共にナデ調整が施されており、外面は二次的な被熱により赤く変色している。

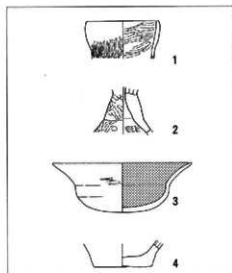


図15 出土土器実測図（古墳時代）
(1:4)

3. 古代以降の土器

1は須恵器の大甕の胴部破片と考えられる。試掘調査の際出土している。外面は平行タタキ、内面は円籾状の当て具痕が認められる。青海波は認められない。2は中世土師器の皿である。SB3床面より出土している。口径約8.0cm、底径約5.6cm、器高約1.6cmで、底部外面は回転糸切り痕が認められる。

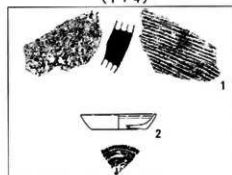


図16 出土土器実測図（古代以降）
(1…1:3 2…1:4)

(2) 石器・石製品

1は、三極に打面を有する剥片である。上部短辺約3.0cm、下部短辺約3.5cm、長辺約4.1cmの台形状を呈する。石材はガラス質安山岩である。2は、垂飾状石製品の一部の可能性が想定される。直径4mm程の穿孔部が一部残存しており、表面には擦痕が認められる。石材は千枚岩で、結晶状物質が金色の輝きを有している。

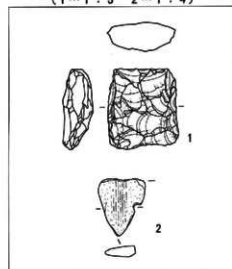


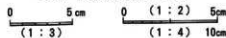
図17 石器・石製品実測図（1:2）

(3) その他の遺物

調査区内より、古銭が1点表面採集されている。錆化が著しく、「寶」の一字以外は判読不能である。中世、もしくは近世の遺物である可能性が高いが、詳細は不明である。



図18 古銭拓影図（1:2）



遺物観察表

遺構内床面直上出土器

遺構名	No.	種別	器種	時期	法量 (cm)		部位・遺存	調整		特記	
					口径	底径		器高	内面		外面
1号住居 (S.B-1)	1	土師器	甕	古墳時代前期	15.2	—	—	口縁部～胴部1/2周	ナデ	タテへ斜めのハケメ	内面黒色処理 内面黒色処理
	2	土師器	杯	古墳時代前期	—	—	—	底部1周	不明瞭	ヘラミガキ	
2号住居 (S.B-2)	1	土師器	甕	古墳時代前期	14.7	—	—	口縁部～胴部1/3周	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黒色処理 内面黒色処理
	2	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	底部1周	ハケメ	ハケメ	
3号住居 (S.B-3)	1	土師器	杯	古墳時代前期	13.2	(5.4)	4.6	口縁部～底部1/3周	ヨコヘラミガキ	ヘラミガキ?	内面黒色処理 内面黒色処理
	2	土師器	杯	古墳時代前期	15.4	—	—	口縁部～胴部1/4周	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	
	3	土師器	杯	古墳時代前期	15.4	(4.0)	4.7	口縁部～底部1/3周	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	内面黒色処理 内面黒色処理
	4	土師器	杯	古墳時代前期	15.6	(11.1)	5.2	口縁部～底部1/4周	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	
	5	土師器	杯	古墳時代前期	13.8	—	—	口縁部～胴部1/4周	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	内面黒色処理 内面黒色処理
	6	土師器	杯	古墳時代前期	—	—	—	底部1周	ヘラミガキ(赤彩)	ヘラミガキ(赤彩)	
7	土師器	高杯	古墳時代前期	—	—	—	脚柱状部1/2周	ナデ	ヘラミガキ(赤彩) 脚柱部ナデ	杯部内面黒色処理	
8	土師器	甕	古墳時代後期	17.0	—	—	口縁部～胴部1/3周	ヨコハケ	ヨコハケ	胴部ナデ	
9	土師器	甕	古墳時代後期	24.0	—	—	口縁部～胴部1/6周	ヨコハケ	斜めのハケメ		
10	土師器	甕	古墳時代後期	20.7	7.2	28.5	口縁部～底部 9/10周	口縁部・胴部ナデ	ナデ	胴部のち ヨコハケ	長割傾向
11	土師器	甕	古墳時代後期	25.0	9.0	27.0	口縁部～底部1/2周	一部ハケメ残存	胴部ナデ 杯部ナデ	杯部ナデ	杯部ナデ

遺構内覆土・遺構外出土器 (弥生時代の土器)

No.	出土位置	種別	器種	時期・型式	部位・遺存	法量 (cm)		内面	調整		特記
						口径	底径		器高	内面	
1	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	2条のヘラ山形文	口縁部文
2	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	2条のヘラ山形文	
3	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	口縁部縦線状文	口縁部文 口縁部文
4	SB2	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文	
5	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
6	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・ヘラ山形文	
7	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ハケミによる幾何的模様状文	口縁部文 口縁部文
8	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	
9	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	横4本
10	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	
11	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	不明瞭	—	口縁部のちへら山形文	口縁部文 口縁部文
12	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	不明瞭	—	口縁部のちへら山形文	
13	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
14	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文	
15	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文	口縁部文 口縁部文
16	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文	
17	SB3覆土下層	弥生土器	甕	後期南蛮吉田式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文(右下がり)	口縁部文 口縁部文
18	SB3覆土下層	弥生土器	甕	後期南蛮吉田式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文(右下がり)	
19	SB1A	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文	口縁部文 口縁部文
20	SB3A	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文	
21	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
22	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文・斜線状文	
23	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文	口縁部文 口縁部文
24	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文	
25	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	縦線状文	口縁部文 口縁部文
26	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	縦線状文	
27	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部	—	—	ナデ	—	縦線状文	口縁部文 口縁部文
28	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	縦線状文・ヘラ山形文	
29	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	不明瞭	—	縦線状文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
30	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	不明瞭	—	ヘラメのちへら山形文	
31	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ハケメ	—	縦線状文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
32	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ハケメ	—	縦線状文・斜線状文	
33	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	ヘラ山形文	口縁部文 口縁部文
34	SB1B直	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	縦線状文	
35	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	縦線状文	口縁部文 口縁部文
36	SB3覆土下層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部	—	—	ナデ	—	縦線状文	
37	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	口縁部1/2周	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
38	SB3覆土上層	弥生土器	甕	中期葉林式	胴部～底部1周	—	—	ナデ	—	口縁部のちへら山形文・斜線状文	
39	焼出層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	底部1周	—	5.6	—	—	横のミガキ調整	口縁部文 口縁部文
40	焼出層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	底部1周	—	5.6	—	—	横のミガキ調整	
41	SB3覆土上層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	杯部1/6周	17.0	—	—	—	ヨコハケのちへら山形文・斜線状文	口縁部文 口縁部文
42	焼出層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	杯部1/4周	16.8	—	—	—	ヨコハケのちへら山形文・斜線状文	
43	SB3覆土上層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	杯部1/3周	—	—	—	—	横のミガキ調整・赤彩	口縁部文 口縁部文
44	焼出層	弥生土器	高杯	後期南蛮吉田式	杯部1/3周	—	—	—	—	横のミガキ調整・赤彩	

遺構内覆土・遺構外出土器 (古墳時代の土器)

No.	出土位置	種別	器種	時期・型式	部位・遺存	法量 (cm)		内面	調整		特記
						口径	底径		器高	内面	
1	SB3覆土下層	土師器	甕	古墳時代前期	口縁部1/4周	7.6	—	—	ヨコヘラミガキ	タテヘラミガキ	口縁部文 口縁部文
2	焼出層	土師器	甕	古墳時代前期	口縁部1周	—	—	—	一部ハケメ残存	ヘラミガキ	
3	焼出層	土師器	甕	古墳時代前期	口縁部～胴部1/4周	14.6	—	5.8	—	ヘラミガキ・黒色処理	ハケメのちへら山形文
4	焼出層	土師器	甕	古墳時代前期	底部1周	—	—	—	ナデ	ナデ	ナデ

遺構内覆土・遺構外出土器 (古代以降の土器)

No.	出土位置	種別	器種	時期・型式	部位・遺存	法量 (cm)		内面	調整		特記
						口径	底径		器高	内面	
1	焼出層	新羅系	大甕	古代	胴部	—	—	—	円筒当て具	平打タタキ目	口縁部文 口縁部文
2	SB3覆土上層	新羅系	大甕	中世	口縁部～底部	8.0	5.6	1.6	—	クロク目	

石器・石製品

No.	出土位置	器種	時期	遺存	特記
1	SB3覆土上層	剥片	弥生時代	完形	ガラス質灰山石
2	SB3覆土上層	重板状石製品?	不明	剥片	平板状

その他の遺物

No.	出土位置	種別	法量 (cm)	時期	遺存	特記
1	表後資料	古銭	径2.3	古世?	完形	酸化著しい

第IV章 結 語

今回の発掘調査において確認された主な遺構は、出土遺物などからして、いずれも古墳時代後期の竪穴住居であったが、旧建物による擾乱が多く、カマドを確認できた住居は1軒もなかった。しかし、3号住居址に関しては、間仕切りと考えられる溝の検出や、6本分あったと思われる支柱穴の配置など、注目すべき点はある。

本調査区で検出された遺構だけでは数も少なく、考察を深めるのは難しい。そこで、周辺の考古学的環境から本調査区の性格を探ってきたい。吉田地区周辺の遺跡で生活址が見られるのは縄文時代からで、吉田古屋敷(北長野駅前B-1地区)・吉田四ツ屋遺跡が挙げられる。他にも吉田古屋敷(ボレストステーション建設地点)から縄文土器が出土するが、当地区における遺構の分布は希薄であると見られる。

弥生時代中期・後期において大規模な集落が形成されたのが、吉田高校グランド遺跡である。しかし、やや扇状地を下った吉田古屋敷遺跡(踏切地点・新幹線地点)・吉田四ツ屋遺跡では竪穴住居が遺跡内においてまばらに存在する。このことから、これらの遺跡の周辺では、大規模な集落ではなく小規模な住居域が形成されていたと見られている。

古墳時代になると、多くの遺跡で遺構が確認されるようになる。前期の遺構は少ないが、吉田四ツ屋遺跡からは周溝を伴う墳丘墓が確認されている。ただし、墳丘墓に伴うと思われる集落の把握はない。一方、中期・後期になると、この時代の竪穴住居が確認できる遺跡は増え、特に後期を主体とした遺跡が多い。本調査区に近接する吉田古屋敷遺跡・吉田町東遺跡などでも古墳時代後期の竪穴住居が増加し、集落が形成され始めた時期であると思われる。本調査区は、150㎡にも満たない範囲ながらも、確認された3軒の竪穴住居がすべて古墳時代後期に属していた。このことから、古墳時代後期における吉田地区の居住域の広がりや、本調査区まで及んでおり、吉田地区西方にも居住域が広がっていた可能性があると考えられる。

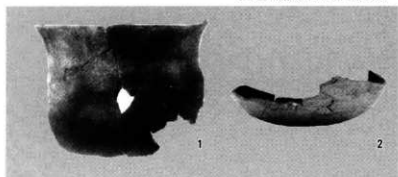
なお、本調査区北側には、中世居館跡とされる「善教寺居館跡」が隣接しているが、調査区内から中世に関する遺構は確認されず、遺物の出土も僅少であった。

<参考文献> 『浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)』 長野市教育委員会 2006

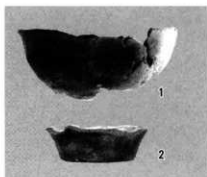


発掘作業員集合写真

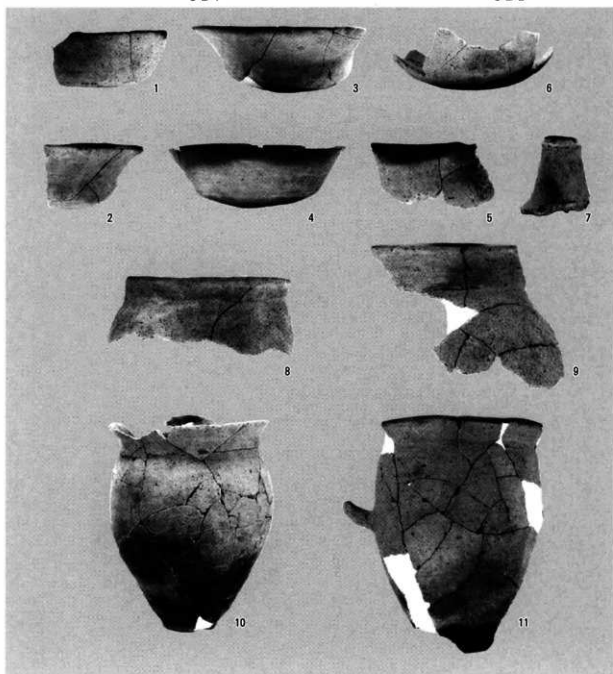
遺構内床面直上出土遺物



SB 1

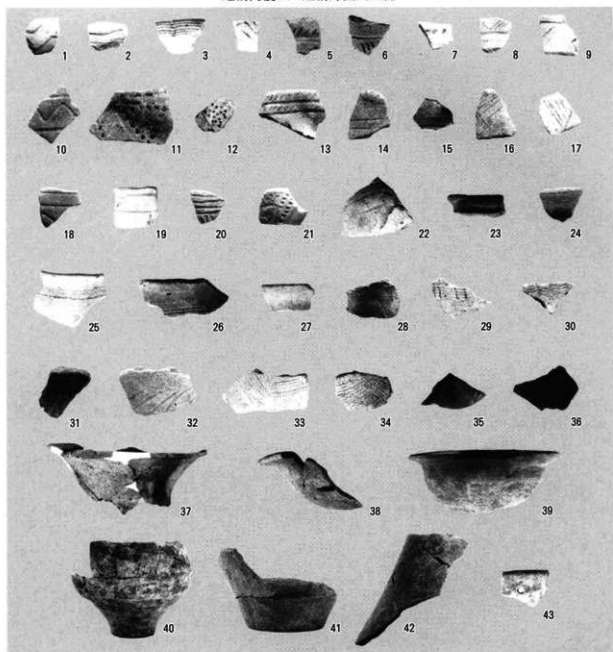


SB 2



SB 3

遺構内覆土・遺構外出土遺物



弥生時代の土器



古墳時代の土器



古墳以降の土器

石器・石製品

その他の遺物

た ま き い が え り
田 牧 居 帰 遺 跡 (2)

— アメニティタウン二次開発団地地点 —

2007年3月

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、東邦商事株式会社が施行する宅地造成事業「アメニティタウン二次開発団地」に先立ち、平成18年度に記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東邦商事株式会社と長野市長との間で委託受託契約を締結し、長野市教育委員会が実施したものであり、業務は文化財課埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「田牧居層」範囲内に位置し、事業名に拠って「アメニティタウン二次開発団地地点」として報告する。所在地は、長野市稲里町田牧字居層450-58番地である。
- 4 発掘調査における現地作業の期間は、平成18年4月6日～4月18日である。
- 5 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）で保管している。

目 次

例言・目次

第I章 調査経過	第III章 調査成果
第1節 調査に至る経過……………1	第1節 調査概要……………6
第2節 発掘調査の経過……………2	第2節 遺構……………8
第3節 調査体制……………4	第3節 遺物……………10
第II章 遺跡の立地と環境……………5	第IV章 結 語……………14

挿 図 目 次

図 1	調査地周辺の地形	1
図 2	事業計画と試掘調査地点・発掘調査範囲	2
図 3	遺跡周辺の地形	5
図 4	調査範囲全体図	6
図 5	土層断面図	7
図 6	1号住居	8
図 7	2号住居	8
図 8	3号住居	10
図 9	1号土坑	10
図 10	出土器物実測図	11
図 11	犀川（川中島）扇状地と遺跡群	14

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経過

長野市内で計画される宅地造成等の開発行為に関しては、都市計画法第32条の規定に基づく市との事前協議に際し、宅地開発指導要綱に準拠して埋蔵文化財保護に係る必要事項を行政指導し、工事に伴って埋蔵文化財が破壊される恐れのある場合には、発掘調査を実施して記録保存を図ることとしている。

当該発掘調査は、平成17年度に東邦商事株式会社から開発行為に関する協議申出のあった宅地造成計画を起因事業とするものであり、発掘調査の実施に至るまでの協議等の経過は次のとおりである。

平成17年9月22日 東邦商事株式会社から開発行為に関する事前協議申出。

隣接する長野県住宅供給公社の既存住宅団地造成にあたって、平成4年に記録保存のための発掘調査を実施した経緯から、市教委埋蔵文化財センターにおいては埋蔵文化財包蔵の可能性が高いと判断し、文化財保護法上の手続きと試掘確認調査実施について回答する。

9月30日 文化財保護法93条の規定に基づく土木工事等のための発掘の届出。

10月7日 遺跡範囲及び保護措置策定のため、試掘確認調査を実施し、遺物包含層の存在を確認。以降、東邦商事株式会社と埋蔵文化財センターとの間で、記録保存のための発掘調査実施について継続協議。

平成18年3月23日 遺構分布状態確認及び発掘調査計画策定のための予備調査を実施。

遺構確認結果から、記録保存のための発掘調査対象範囲を特定。遺構存在が確認された開発区域内南端の幅員9m道路について発掘調査を実施、遺構存在の可能性が希少なその他の路線については必要に応じて工事立会を実施する計画とする。

4月5日 東邦商事株式会社と長野市との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。発掘調査着手に至る。

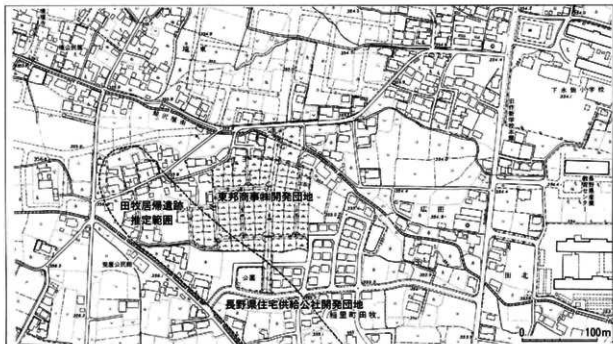


図1 調査地周辺の地形（1：5,000）

第2節 発掘調査の経過

各地点における発掘作業は、委託契約締結後に直ちに着手した。作業の経過は次のとおりである。

- 4月6日 現地へ機器材を搬入、重機による表土除去作業を開始する。
- 4月10日 作業員を導入して遺構上面の検出作業に着手。同日中に遺構検出を完了し、写真撮影を実施する。
- 4月11日 遺構範囲確認のため、調査区北側に試掘坑を設定、一部遺構の掘り下げに着手する。
- 4月12日 調査区南側の遺構重複関係と遺構平面形確定のための試掘作業及び遺構掘り下げを実施する。
- 4月13日 調査区全体の遺構分布・埋没状況の把握を終え、各遺構について本格的に掘り下げを実施する。
- 4月14日 各遺構の掘り下げを終了し、全体写真撮影を実施する。
- 4月17日 遺構測量（委託）を実施する。
- 4月20日 遺構測量成果に基づき、各遺構及び土層断面に関する実測図を作成する。以上をもって、現地における掘削及び記録作業の全てを終了する。以降、埋蔵文化財センターにおいて整理作業を実施する中で、報告書刊行に至る。

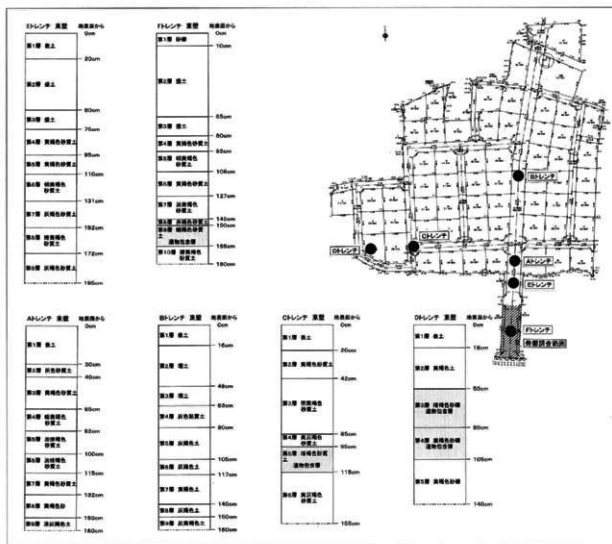


図2 事業計画と試掘調査地点・発掘調査範囲（1：2,500）及び土層柱状図



表土除去作業（4月6日）



遺構上面検出作業（4月10日）



遺構上面検出状態（4月10日）



表土除去作業（4月6日）



遺構掘り下げ作業（4月13日）



遺構掘り下げ作業（4月14日）



遺構検出状態（4月14日）



遺構検出完了状態（4月14日）

第3節 調査体制

発掘調査委託業務〔委託者〕 東邦商事株式会社 代表取締役 増子 清（長野市新田町1464番地）

発掘調査委託業務〔受託者〕 長野市 長野市長 鷲澤 正一（長野市大字鶴賀緑町1613番地）

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 睦秀
総括管理者	文化財課長	北村真一郎
統括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口 忠良
庶務担当	係 長	宮沢 和雄
	職 員	吉村 久江 事務員 塚田 容子
調査担当	係 長	青木 和明（調査員・編著）
	主 査	風間 栄一 小林 和子（調査員）
	主 事	宿野 隆史
	専 門 員	遠藤恵美子 長瀬 出 山野井智子 石丸 敦史 小出 泰弘 森田 利枝（調査員） 山岸 千晃 小池 勝典（調査員） 柴田 洋孝（調査員）

整理調査員 青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 烏羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理作業員 倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

重機掘削協力 柳守谷商会 発掘作業協力 風間苑(有)

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所

長野市教育委員会埋蔵文化財センター担当による発掘調査の遂行においては、発掘調査事業の委託者である東邦商事株式会社の関係各位より、多大なるご支援をいただいた。埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、円滑に調査事業を実施できるようご配慮を賜ったことに対し、深甚なる謝意を表するものである。



表土除去（南から）



遺構検出（北から）

第II章 遺跡の立地と環境

本遺跡が所在する長野市更北地区は、県下最大規模の扇状地といわれている犀川扇状地の東南域に位置する。犀川上流から運搬堆積した多量の土砂に覆われていることから、埋蔵文化財包蔵地の確認と特定に困難が伴う地域となっていたが、近年に至り国道等道路整備の進捗にあわせて土地区画整理事業や大規模宅地開発事業が活発化することに伴い、遺跡の新発見が相次いでいる。集落遺跡の分布は、犀川旧流路に沿って発達する帯状の微高地と重なるようであり、今後も未知の遺跡が発見される可能性が暗示されている。

- 1 田中沖遺跡Ⅰ 所在地：小島田町字田中沖・新田 調査年：S53・54・H6～8
起因事業：国道18号線・県道長野真田線道路改良 検出遺構：古墳時代後期～平安時代堅穴住居80以上
- 2 田中沖遺跡Ⅱ 所在地：稲里町広田字南大下・篠ノ井西寺尾神明上礎 調査年S63・H1
起因事業：神明広田土地区画整理 検出遺構：古墳時代後期～平安時代堅穴住居100以上
- 3 豪河原遺跡 所在地：篠ノ井西寺尾神明豪河原・下礎 調査年：H4・5・7
起因事業：県道長野真田線道路改良 検出遺構：平安時代堅穴住居50以上
- 4 田牧居帰遺跡 所在地：稲里町田牧字居帰 調査年：H4
起因事業：県住宅供給公社宅地造成 検出遺構：奈良～平安時代溝・平安時代堅穴住居10以上
- 5 上九反遺跡 所在地：稲里町田牧字上九反 調査年：H7
起因事業：稲里中央土地区画整理 検出遺構：古墳時代後期～平安時代堅穴住居25以上

(各遺跡の調査報告書は第四章に掲載)



図3 遺跡周辺の地形 (1:15,000)

第三章 調査成果

第1節 調査概要

調査地における土層堆積は、細砂とシルトによって構成された砂質土壌が特徴的である。明るい黄褐色系土層が厚い堆積をみせ、犀川扇状地内の微高地を形成する典型的な堆積状態といえよう。遺物包含層は、表土下90cmで厚さ20cm程度の灰褐色系土層として観察され、遺構はその下に堆積する灰黄色細砂層に掘り込まれている。調査においては、同層上面を遺構検出面とし、重機によって上層を除去した後に出検及び掘り下げを実施した。

調査区において検出確認できた遺構は、竪穴住居3軒、土坑1基及び小穴である。土坑を除いて重複関係を有さず、竪穴住居がいずれも主軸方向を南北としている点から、時間的に近接した一連の構築である可能性が示唆される。なお、調査区北端においては、遺物包含層が標高を減じながら消滅し、犀川旧流路へ向かって地形が落ち込んでいく状況を観察することができる。



全景 (南から)

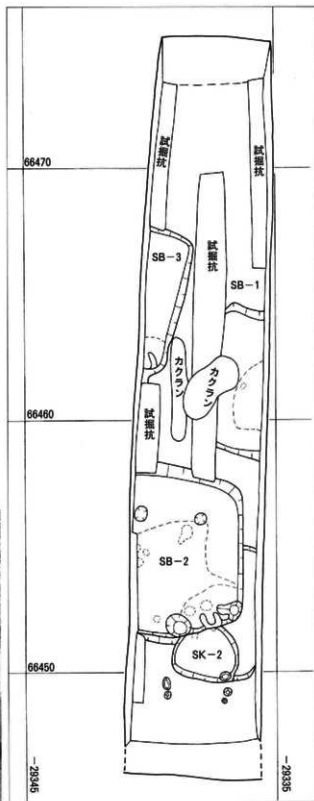


図4 調査範囲全体図 (1:150)



土層断面 (調査区西壁)

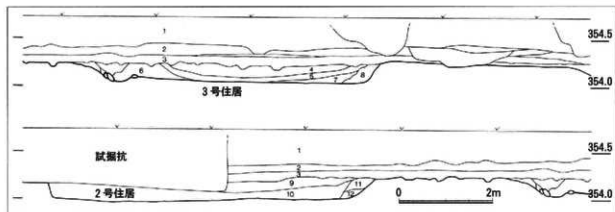


図5 土層断面図 (1:80)

1・2:表土耕作土層(黄褐色~灰褐色) 3:遺物包含層(灰褐色~黒褐色) 4~8:3号住居覆土(4:黄褐色、5~8:炭化物混合黒褐色~灰褐色) 9~12:2号住居覆土(9:黒褐色、10~12:灰褐色)

遺構名 (記号)	時代 (期)	遺 構		出土遺物(土器類)			遺物注記 (記号)
		形態・施設・規模	備考	重量(g)	実測数	特記	
1号住居 (SB-1)	平安時代	方形 5.8×?m		360	1		T I K II S B 1
2号住居 (SB-2)	平安時代	方形 7.0×?m 南壁カマド カマド横ビット	SK-1が重複	3,060	28		T I K II S B 2
3号住居 (SB-3)	平安時代	方形 5.8×?m 南東隅カマド		2,570	14		T I K II S B 3
1号土坑 (SK-1)	平安時代	円形 2.6×2.3m	SB-2に重複	210	1	獣骨?	T I K II S K 1
試掘坑				120	0		T I K II 西T・東T
検出面				120	0		T I K II 検出
合 計				6,440	44		

検出遺構 一覧表

第2節 遺構

1号住居 (SB-1)

調査区の中ほどに位置し、西側半分程度を検出している。西壁部分が予備調査において設定した試掘坑によって失われているが、南北5.8mの方形竪穴と推定される。検出面から床面までの深さは15cm程度であり、他の住居と比較して浅い掘込となっている。床面は比較的平坦であり、住居中央範囲には黄灰色シルト質粘土を用いた貼床範囲が明瞭であり、三和土状に硬化している。また、床面中央付近には径20cm程度の焼土の堆積が観察される。調査範囲においてはカマド等施設の存在は確認されていない。遺物出土量は少なく、土器類の破片のみであるが、平安時代の所産と判断される。

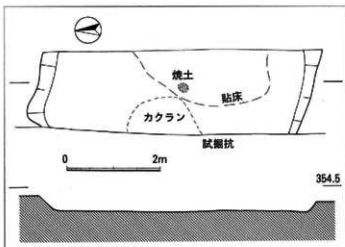


図6 1号住居 (1:80)

2号住居 (SB-2)

調査区の南側に位置し、上部に1号土坑が重複するが、西壁付近を除いてほぼ全形を検出している。南北7mを測る方形竪穴であり、検出面から床面までの深さは30cm程度である。南壁から中央にかけての床面は、黄褐色シルトの貼床によってきわめて堅緻かつ平坦であり、三和土状に硬化している。また、被熱によって焼土・硬化した範囲が数箇所において観察される。これに対して、北壁及び東壁沿いの1.5m内外の範囲では床面が不明瞭かつ軟弱となり、床レベルすら判然としない。なお、同範囲において検出した2箇所の小穴は径40~50cmの浅い窪みであり、柱穴とは理解しがたい。

カマドは南壁の東隅に近く位置し、竪大前後の礎を芯として構築されている。壁際には煙道が僅かに遺存し、焚口部分の径50cm範囲は焼土硬化、その周辺の床面には厚さ3~5cmにわたって灰・炭化物の堆積が認められる。また、カマドの両側には深さ20cm程度の不整形ピットが存在し、西側ピット内からは比較的多数の遺物出

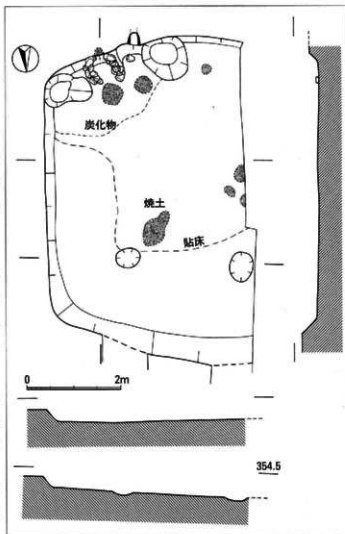
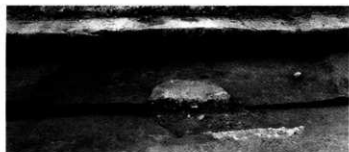


図7 2号住居 (1:80)



1号住居（西から）



3号住居（北から）



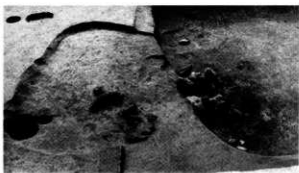
2号住居（北から）



3号住居カマド（北から）



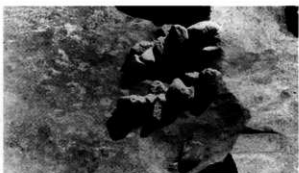
2号住居・1号土坑（南から）



2号住居・1号土坑（東から）



2号住居カマド・1号土坑（北から）



2号住居カマド（西から）

土をみている。なお、当該カマドと西側ピットの間には、もう一つの煙道と焚口部焼土の痕跡が遺存していることから、当該カマドは付け替えによって東寄りに移動していることが明らかであり、住居の使用が長期にわたる可能性を示唆している。遺物出土量は豊富であり、覆土上層、下層、カマド及び西側ピット内から完形を含む平安時代土器類の出土をみている。

3号住居 (SB-3)

1号住居の西側に位置し、東壁範囲のみの検出にとどまり、南北5.8m程度の方形竪穴と推定される。検出面から床面までの深さは30~40cmであり、検出範囲においては貼床を確認せず、床面は軟弱である。カマドは南東隅に位置し、2号住居と同様に竪大前後の礫を芯として構築されている。壁際には煙道の一部が遺存し、カマド内には焼土、焚口には灰・炭化物の堆積が観察される。遺物出土量は豊富であり、覆土下層から破片を中心とした平安時代土器類の出土をみている。また、カマド内からは篋及び羽釜の破片が多数出土している。

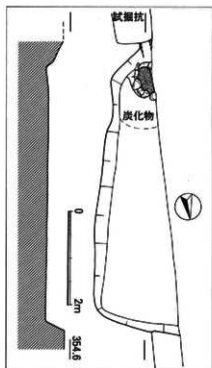


図8 3号住居 (1:80)

1号土坑 (SK-1)

調査区の南側に位置し、一部が2号住居カマド付近の上部に重複している。2.6×2.3mの不整形円形であり、検出面から底面までの深さは10cm内外の浅い掘込となる。なお、この土坑の北西方向には長さ5mの範囲で深さ5cm程度の浅い掘込が連続している。当初、2号住居関連の落ち込みと考えたが、土坑と関連するなんらかの掘込と理解することの方が妥当であると判断しておきたい。遺物出土量は少ないが、灰釉陶器瓶の口縁部大破片出土によって、平安時代の所産と判断される。また、土坑底面から浮いた位置で、獣骨と考えられる四肢骨の出土もみているが、腐食劣化が著しく同定には至っていない。

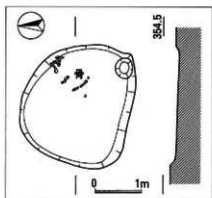


図9 1号土坑 (1:80)

第3節 遺物

出土遺物は、1号土坑出土の獣骨を別として土器類に限定される。

各遺構と検出面から出土した土器類の総量は、3.5kgを量るなか、小破片でも実測可能と判断された個体をすべて抽出し、44個体を図示した。なお、実測遺物一覧表中の「遺存」とは、図示した範囲に関する遺存割合であり、ほぼ完形の個体を「略完」、以下全周に対しての割合によって「1/4・1/3・1/2・2/3」のいずれかとし、それを下回る破片を「小片」と表記している。

土器類は、平安時代所属の土師器杯が主体であり、ほぼ同一時期の様相を示すものと判断される。羽釜や灰釉陶器の存在から、平安時代後期、10世紀後半から11世紀にかけての所産としておきたい。

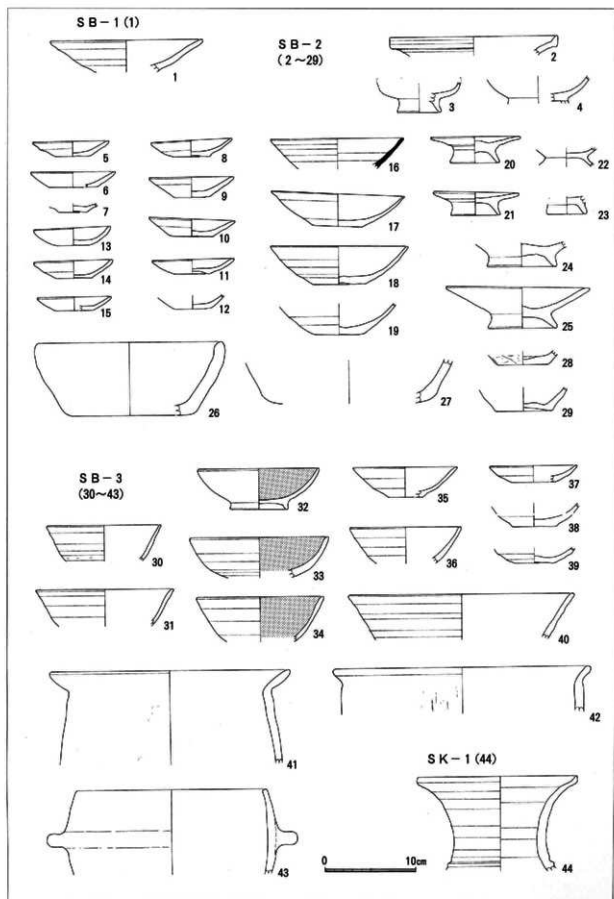
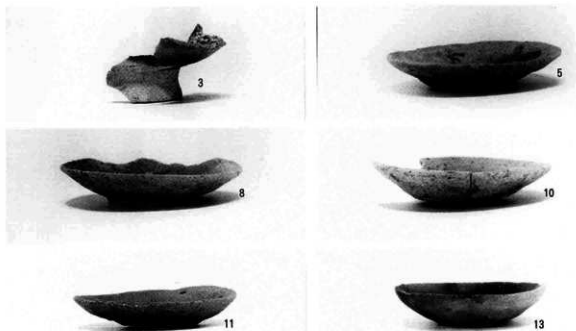


图10 出土遺物実測図 (1 : 4)

No.	遺構名	位置	種別	器種	遺存	特記	No.	遺構名	位置	種別	器種	遺存	特記
1	1号住居		土師器	高台?	1/3		23	2号住居	下層	土師器	高台杯	略完	内面黒色処理?
2	2号住居	下層	灰釉	瓶	小片		24	2号住居	下層	土師器	高台杯	略完	
3	2号住居	上層	灰釉	耳皿	1/4		25	2号住居	カマド	土師器	高台杯	略完	
4	2号住居	下層	灰釉	碗	小片	無釉?	26	2号住居	下層	土師器	鍋?	小片	
5	2号住居	上層	土師器	杯	完形	底部糸切	27	2号住居	ビット	土師器	鍋?	小片	黒色処理?
6	2号住居	上層	土師器	杯	1/4		28	2号住居	上層	土師器	小甕	1/2	底部ヘラ削
7	2号住居	上層	土師器	杯	略完	底部糸切	29	2号住居	上層	土師器	小甕	1/4	底部糸切
8	2号住居	下層	土師器	杯	略完	底部糸切	30	3号住居	下層	灰釉	碗	小片	
9	2号住居	下層	土師器	杯	小片	底部糸切	31	3号住居	下層	灰釉	碗	小片	
10	2号住居	下層	土師器	杯	略完	底部糸切	32	3号住居	下層	土師器	高台杯	1/2	内面黒色処理
11	2号住居	下層	土師器	杯	略完	底部糸切	33	3号住居	下層	土師器	高台杯	1/4	内面黒色処理
12	2号住居	下層	土師器	杯	略完	底部糸切	34	3号住居	下層	土師器	高台杯	小片	内面黒色処理
13	2号住居	カマド	土師器	杯	完形	底部糸切	35	3号住居	下層	土師器	杯	小片	底部糸切
14	2号住居	ビット	土師器	杯	完形	底部糸切	36	3号住居	下層	土師器	杯	1/4	
15	2号住居	ビット	土師器	杯	1/3	底部糸切	37	3号住居	下層	土師器	杯	1/4	
16	2号住居	下層	土師器	杯	小片		38	3号住居	下層	土師器	杯	2/3	底部糸切
17	2号住居	カマド	土師器	杯	2/3	底部糸切	39	3号住居	下層	土師器	杯	1/3	底部糸切
18	2号住居	ビット	土師器	杯	1/2	底部糸切	40	3号住居	下層	土師器	鉢?	小片	
19	2号住居	ビット	土師器	杯	2/3	底部糸切	41	3号住居	カマド	土師器	甕	小片	外面ヘラ削
20	2号住居	上層	土師器	高台杯	略完		42	3号住居	カマド	土師器	甕	小片	外面ヘラ削
21	2号住居	下層	土師器	高台杯	完		43	3号住居	カマド	土師器	羽釜	小片	
22	2号住居	下層	土師器	高台杯	1/2		44	1号土坑		灰釉	杯	1/2	

実測遺物一覧表



出土遺物写真①



14



20



17



21



18



25



33



32



41



43

出土遺物写真②

第四章 結語

田牧居層遺跡の発掘調査は、平成4年度の長野県住宅供給公社里里住宅団地造成に伴う調査に続き、この度の調査で第2次を数えることとなった。第1次地点隣接部での調査であり、とりたてて新たな発見というべきものはないが、今回の調査成果によって、扇状地内に発達した帯状の微高地に重なる遺跡範囲と平安時代集落の実態がさらに鮮明になったものといえよう。これまでのところ、犀川扇状地において存在が確認され、発掘調査が実施された遺跡は本遺跡も含めて少数にとどまっている。既刊の発掘調査報告書においても指摘されてきたとおり、この広大な扇状地内には未だ多くの集落遺跡が埋没していると考えるべきであり、この地域の歴史的展開を明らかにする手がかりとして、集落遺跡の所在を確定していく作業が今後にも必要となっている。

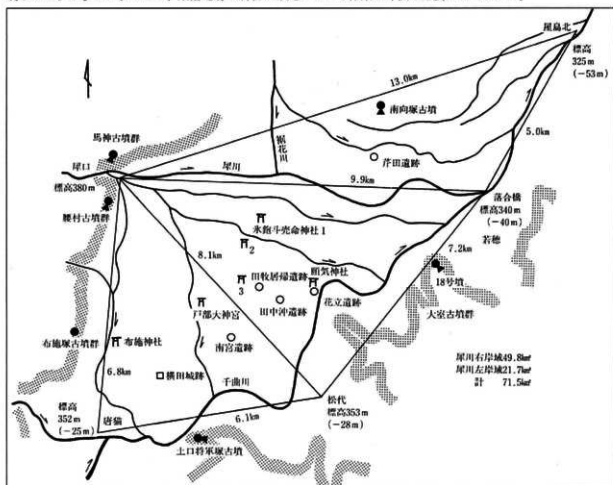


図11 犀川(川中島)扇状地と遺跡群

本図は、森嶋陸氏により作成された(初出「田中沖遺跡」1980)。犀川扇状地における未知の集落遺跡存在の意義について注意を喚起したものであり、今日に繋がる論考として高く評価されるものである。下記の文献を併せて参考とされたい。

【参考文献】 犀川扇状地所在遺跡の発掘調査報告書 長野市教育委員会発行「長野市の埋蔵文化財」

第7集「田中沖遺跡」1980、第42集「田中沖遺跡Ⅱ」1991、第43集「南宮遺跡」1992

第52集「田牧居層遺跡」1993、第75集「吉田四つ屋遺跡・三輪遺跡(6)・澁河原遺跡」1996

第85集「上九反遺跡」1997、第93集「澁河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅲ」1998、第96集「南宮遺跡Ⅱ」2000

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん よしだふるやしきいせき・たまきいがえりいせき
書名	浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(4) ・ 田牧居場遺跡(2)
副書名	ドリームコートセブン新築工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書 アメニティタウン二次開発団地地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第119集
編著者名	青木和明・小池勝典・柴田洋孝
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004
発行年月日	2007(平成19)年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉田古屋敷遺跡	長野県長野市 吉田3丁目 809-8	20201	A-087	36° 40' 4"	138° 13' 10"	20061023 ～ 20061110	130㎡	住宅建設
田牧居場遺跡	長野県長野市 稲里町田牧 字居場450-58	20201	H-005	36° 35' 54"	138° 10' 19"	20060406 ～ 20060418	170㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田古屋敷遺跡	集落	古墳時代 (後期)	竪穴住居 3 性格不明遺構 1 pit群	土師器・石器・石製品				
田牧居場遺跡	集落	平安時代 (10世紀後半 ～11世紀)	竪穴住居 3 土坑 1	土師器・灰軸陶器				

長野市の埋蔵文化財第119集

浅川扇状地遺跡群

吉田古屋敷遺跡(4)

田牧居帰遺跡(2)

平成19年3月26日 印刷

平成19年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 中央プリント株式会社